

\*BOB事務局へ直接お電話かEメールでお知らせください。

わが社の  
**匠**  
職人



有限会社でく工房  
取締役会長  
シーティングエンジニア  
光野有次さん

重度障害者の体を起して暮らす生活をサポート

昭島市にある「でく工房」は、障害のある人のための椅子や食器等の生活補助用具を製作している。取締役会長の光野有次さん（67）は1974年、竹野節子社長の夫・故・竹野廣行氏らとともに、でく工房を立ち上げた。重度障害児は寝たままに生活するのが当たり前だった当時、体をサポートして座れるようにする「座位保持装置」を開発した。

「誰もやっていなかった仕事で、成果がすぐわかり、失敗も改善点もはっきり見えるのが面白いと思いました。子どもたちの笑顔が見たい、もっと良いものを作りたいと夢中で取り組みました」と、光野さんは当時を振り返る。寝たきりだった子どもが座れるようになると、自分で食事ができるようになる。それは福祉の世界で画期的なことだった。光野さんは、利用者の生活現場に関わりたくいと83年から5年間、長崎県にある重症心身障害児施設にリハビリテーションエンジニアとして勤務。その後、長崎で「無限工房」を開き、数々の福祉用具を製作した。

「問題解決」がモノづくりの基本

2011年にでく工房に戻った光野さんは、個別注文の椅子のノウハウを生かしたオリジナル製品「レポ」シリーズの開発に着手した。「レポ」は、立って歩くことはできるが座るのが苦手な子ども向けの椅子だ。骨盤を背面のベルトと左右のパッドでサポートすると、背中が伸び、安定して座れるので、手もつまく使えるようになる。赤ちゃんから使える「チャイルド」と「TS」、小学生から小柄な成人まで使える「ジュニア」、学校椅子に取り付けるタイプの「シート」の4種類をすでに発売。17年春には大人用レポ「ネクスト」を発売する。



座位保持装置を製作する光野さん



バリアフリーデザインの第一人者と称される光野さんは「私のモノづくりの基本は問題解決。問題を解決できれば、その問題を先に解決があり「座る」をサポートします」と話す。

たまNAVI No.67

平成29年(2017年)2月1日 第45号 広報 たまちいき

働きたい

創業、コミュニティビジネス、ボランティア…地域で輝く

誰もが起きて暮らせる用具づくり  
地域に根ざした活動の「でく工房」

「誰もが起きて暮らせるために」をめざし、障がい者や高齢者ひとりひとりの体に合わせた用具で日常生活を支援する「でく工房」（昭島市）。夫の遺志を継いだ女性社長が地域に根差した活動で事業を軌道に乗せている。



竹野節子さん

でく工房は1974年7月、九州の同郷の若者3人が開いた小さな木工所からスタートした。現社長、竹野節子さん（59）の亡き夫廣行さんと現会長の光野有次さんらで、いずれも大手企業でデザインや設計を担ったり、造形芸術の専門家でものづくりに情熱を傾けていた。

「ねたきり」にしない

障がい者を助ける用具づくりを始めたきっかけは、障害を持って生まれた知人の子に「起立を助けるテーパー」を作ったこと。困った人を助ける大工にあやかって名付けた「でく工房」は文字どおり「寝たきりを起こした」。

ねたきりにさせないための用具の評判は障がい者の家族や医療、福祉関係者に広がった。製品は使う人に直接会い、医師やセラピストなど専門家の声を聞きながら、ひとりひとりの体の状態や使う場所に合わせて作る。この方式で受注するには地域に工房があることが必要で、当時社長の廣行さんらは同じ志を持つ若者を集め、若者たちが各地に工房を開いて全国工房連絡会を組織した。この仕事に携わる人は約600人を数える。

夫の遺志を継ぐ

「座れない人を起こし、姿勢を保持する道具」は90年に「座位保持装置」として国の補助制度の対象になり、多くの障がい者が使う道が開けた。このほか自分で立つのを補助する「立位保持装置」や呼吸や嚥下を助ける「腹臥位保持装置」を各地の工房で製造する体制が整った。

「座れない人を起こし、姿勢を保持する道具」は90年に「座位保持装置」として国の補助制度の対象になり、多くの障がい者が使う道が開けた。このほか自分で立つのを補助する「立位保持装置」や呼吸や嚥下を助ける「腹臥位保持装置」を各地の工房で製造する体制が整った。



工房の勉強会には車いす利用者が参加する(でく工房提供)



工房開放日にクッション作りを体験(でく工房提供)

信にも力を入れている。でく工房の製品としては、誰もが使いやすい「すくい易い食器」が発売から30年以上のロングセラー製品。他にも横向きに寝る際の助けとなるクッション「側臥位3兄弟」や、うまく座れない人のための椅子「レポ」などがある。レポは、子どもから大人までのサイズをシリーズで展開し人気製品になっていく。

また毎年、子供のための福祉機器展を多摩地域で開き、定期的に工房での勉強会や工房開放日（設けるなど）地域に根差した活動を展開。竹野社長は「誰もが住みやすい街の一翼を担えれば」と思いながらこの仕事をしていく（文）話している。

(文)鈴木純一

有限会社でく工房

昭島市拜島町2-11-10  
電話 042-542-7040 FAX 042-542-7078  
HP <http://www.deku-kobo.com/>